

32 占領期の婦人雑誌に掲載された灸に 関する記事「プランゲ文庫」より見る

奥津 貴子

神奈川県秦野市

現在、昨今の健康ブームを反映し、婦人雑誌に鍼灸や漢方などの東洋医学に関する記事が数多く掲載されているが、それは今に始まったことではない。同様の現象は大正から昭和初期にかけて発行された婦人雑誌にも見られ、人々の健康に対する関心は時代が変遷しても変わらないことがうかがえる。特に古来より一般大衆にとって身近な医療であった灸に関する記事は多く、大正、昭和にかけても灸が一般大衆の生活に浸透していたことがわかる。今回はその中で、太平洋戦争直後の連合軍による占領統治下に発行された婦人雑誌に掲載された灸に関する記事について述べる。

占領下当時、日本の出版物は連合軍に検閲されていたが、現在それらは「プランゲ文庫」（米国メリーラン

ド大学所蔵。日本では同文庫をマイクロフィッシュ化したものを国立国会図書館が所蔵している）として収集されている。「プランゲ文庫」はGHQの職員として来日したメリーランド大学教授G・W・プランゲ博士がGHQ本内部に保管されていた検閲済みの出版物に歴史的資料としての重要性を見出し、帰国する際にGHQの許可を取り、メリーランド大学に寄贈したもので、戦後史を研究する上で重要なコレクションである。

「プランゲ文庫」に収集されている婦人雑誌には灸に関する記事がいくつか掲載されており、いわゆる家庭療法の歴史の一つとして興味深い。掲載されている婦人雑誌として、現在でも発行されている『主婦之友』（主婦之友社）と『主婦と生活』（主婦と生活社）や、『ホーム』（ハンドブック社）、『家庭』（家庭社）、『婦女界』（婦女界社）、『婦人の国』（婦人の国社）など現在では発行されていない雑誌があるが、それらの執筆者として家庭医学書としてはベストセラーとなり、大正一四年の発行以来、現在でも発行され続けている『赤本』の著者である築田多吉（明治五、昭和三三）や、

昭和の鍼灸を支えた岡部素道（明治四〇～昭和五九）、駒井一雄（明治三一～昭和五七）などの名が見られ、治療家として名を成した彼らのもう一つの顔もうかがえる。特に『主婦之友』は、大正六年の創刊時から家庭療法の一つとして灸に関する記事を数多く掲載しており、中でも築田多吉、駒井一雄らはしばしば記事を書いて寄せている。現在でも多くの東洋医学の関係者がマスコミで東洋医学を紹介しているが、彼らはその先駆けと言える。

記事の内容は身近な疾患を取り上げ、家庭で簡単にできる灸治療を紹介しているものが大半であり、経穴の位置を示した挿絵を入れ、わかりやすく書かれている。特に風邪、胃腸病、婦人病など、現代でも多くの人が罹りやすい疾患の治療方法が多く、今も昔も人々を悩ます疾患は同じであることがうかがえる。その一方で脚気など、栄養摂取量の不足から現代と比較して罹患率が高かったとされる疾患の治療方法もあり、疫学としても興味深い。

文化の形成と発展は、情報を発信するメディアとそ

れを受ける一般大衆の関係により大きく左右され、どちらかの動きが欠如していれば、それはあり得ない。占領期に発行された出版物は、それを如実に表しており、検閲という言論統制の中でも、一般大衆の情報に対する欲求と、それに応えようとした編集者の努力の関係が新たな文化を形成し、発展させていたことは、特筆すべきことである。

戦後六〇年が経った今、一般大衆の東洋医学に対する関心が高まっているとともに、テレビ、インターネットなどメディアの種類も増加し、一般大衆に東洋医学を広める機会は多くなっている。だが、メディアはあっても、東洋医学に精通し、その情報を発信することが出来る者がいなければ、広めることはできない。それを担うのは、東洋医学に携わるすべての医療人ではないだろうか。メディアを活かす者が生き残る時代だからこそ、私達は治療家としての役割とともに、情報発信者としての役割も考えるべきではないだろうか。